

キャリアプランニング 大学生活をいかに充実させるか

専修大学の就職支援は1年次からスタートします。『自分とは何か』を考えることに始まり、自分のテーマにじっくり向き合い、『学生生活』と『職業』が自然とつながる各種プログラムを通じて、就職活動へのアプローチを支援します。

就職活動のスタートは「自分探し」から

グループワークで成長実感



▲役割を意識して会話するワーク
(12/15生田キャンパスで)

就職課では、06年3月卒業予定者を対象に初の企画「就職ゼミナール グループワークで自分探しをしよう」(全3回・4展開)を生田・神田両キャンパスで12月に開講した。1クラス20人が4人のグループに分かれる。生田160人、神田80人の定員は、募集初日でほぼ満員となった。

「就職活動では『自分を客観視できること』と『他人との対話力』が問われます。グループのメンバーと一緒に体験学習を行うことで各自の『気づき』があり、自分を見つめ直すことができる。その『発見』をメンバーで交換し合うことで『対話力』も養われると考えます。この実習を自己成長のきっかけにしてほしい」と、担当する就職課員は狙いを語る。

ある日の実習を紹介しよう。4人のグループメンバーが「尋ねる」「答える」「観察する」という役割を意識的に分担し会話する。「自分について今まで他人からどんなふうに言われたか」などのテーマを提示し、「尋ねる」役は「どのように聞けば相手が答えやすいか。話したいことを引き出せるか」に留意し、「答える」役は「自分を理解してもらうことを目的とし、会話を継続させる」を念頭に返答する。観察役は「会話している2人の間にどういったことが起きているか。会話はスムーズか」をチェックリストに率直に記入。その後フィードバックを行い実習内容の分析をする。『考える』時間を設けることで体験が自分自身の中に残る効果がある。

参加者は「他人の視点や客観性を意識することで、自分探しのきっかけとなった」「一人で進めていく就職活動では得られないものを知ることができた」と、それぞれの成長を実感したようだ。

幅広い研修先を用意 インターンシップ

経営・経済両学部が受け入れ企業招き体験発表会



<経営学部の発表会> 田村麻衣さ



<経済学部の発表会> 川崎市役

ん、宮本尚子さんが報告、その後研 所へ 研修に行った3人が報告。写
修先の キャピトル東急ホテルの方が 真は研修先の概要説明の場面
感想を話した。

『社会・ビジネス』を肌で感じる場として、各学部でインターンシップが導入されている。現在、経済、経営、ネットワーク情報学部で実施しており、一般企業のほか、NPO、N GO、ベンチャー企業といった幅広い研修先が用意されている。

12月には、経営学部(14日)、経済学部(18日)の体験発表会が行われた。両学部とも受け入れ先の企業、自治体の担当者約60人を招き、研修の内容や今後の課題などを報告、激励のコメントをいただいた。

6年目となる経営学部は「企業研修」を受講する21人が14社で研修を受けた。魚田勝臣学部長はあいさつで「研修の前と後では目の輝きが違う。それほどの体験が出来たのだと思う」と意識改革の場としてのインターンシップの重要性を語った。

「学外特別研修」として4年目となる経済学科は、24社で36人が研修。参加者は高い目的意識と強い責任感の必要性を感じたようで「この経験を今後に生かしたい」と話していた。

05年度から学部が拡大し、法学部では「社会活動」の科目で企業や弁護士事務所、公共団体において実践的法務などを体験することが出来る。

体育会 部活拝見 (特別版)

43部2同好会を擁する体育会は栄光の歴史を有し、国際大会でも活躍した数々の名選手を輩出してきた。高校まで続けてきたスポーツを極めたい人、大学で新たなスポーツにチャレンジしたい人…。体育会は皆さんの入部を心待ちにしています。

「五輪選手を」を合言葉に

アーチェリー部

創部40周年を迎えた昨年、女子が2年ぶりに1部に復帰し、男女ともますます活躍が期待される。インカレ優勝者も輩出しているこの強豪部は「専大からオリンピック選手を」を合言葉に、日々研鑽を積む。

男女合わせて約40人の部員はほとんどが未経験者だという。前主将の高橋秀暢くん(法4・専大北上高＝円内)は、高校の頃から「弓」に興味があり、迷わず入部した。「初めて射った時の衝撃は忘れられません」と語る。新入部員は16ポンドの練習弓からスタートし、男子は35～40ポンド、女子は28～34ポンド程度の強さの弓を引くようになる(1ポンド＝0.45キログラム)。授業期間は週4日、1日100本程度、休暇期間や合宿では150～200本の矢を射る。「集中力を高めながら一本一本射っていく。会心の射が出来た時の爽快感は最高です」。

通常の活動と共に力を入れているのが「東京都身体障がい者アーチェリー大会」(現・王子オープン)との交流だ。OBの緒方吾朗さん(平12商)が、学生時代の8年前から会場設営などをサポートし、試合にも参加している。

「アーチェリーは健常者と障がい者が一緒に競うことが出来る数少ないスポーツです。活動に参加することでさまざまなことを学ばせていただいています」。この活動が育友会で評価され、第4回奨励賞も受賞。

「運動になじみのなかった人も大歓迎です。努力次第では1、2年で全日本クラスの大大会に出場も可能です。『腕が長く、なで肩気味で太いあご』の人が向いているんですよ」と高橋くん。あなたもチャレンジしてみては。

2部優勝で勢い 1部の壁へ挑戦

ボクシング部



▲基本練習が大切(サンドバッグをたたく)

関東大学リーグ2部優勝を果たし、ますます勢いに乗るボクシング部。昨年11月に行われた全日本アマチュア選手権で川内将嗣くん(商1・佐賀龍谷高)が準優勝を果たすなど、個人の活躍も目覚ましい。

約20人の部員は、その大半が経験者。練習は日曜以外の週6日、第1体育館で基礎トレーニングから実践さながらのスパarringまで、コーチとの話し合いで決められる。拳で攻撃するという激しいスポーツであるがゆえに、顔面や拳の傷はやむを得ない。「顔の表面の皮膚は他の部分に比べて繊維が均一で切れやすいので、最大の注意を払って練習しています」と苦笑する。

一番の苦労は試合前の減量。「体重を絞り込む時はひたすら走ります。食事も揚げ物や甘い物を避けるなど、制限しているんですよ」と語るのは舟山弘志くん(商3・花咲徳栄高)。ボクシングは体重別で、8階級(高校生を除く)で行われるため、試合前の計量で20グラムでもオーバー出来ないのが鉄則だと言う。厳正な計量は、身体的なハンデをなくし、対等な立場でどちらが強いのかを決めるボクシングのルール。

逆に一番の喜びは「試合に勝ち、自分の腕が上がったと感じる瞬間です」。日々の努力の積み重ねが勝利の喜びに、なんとも言えない、爽快感を生まれさせると言う。

近年、成長し続けるもあと一歩、1部リーグの大きな壁が立ちはだかる。ずばり今年の目標は1部復帰と全日本選手権優勝。メンバー全員の強い決意のもと、新たなシーズンの幕開けが今から待ちきれない。

(伊東 明希・文2)

勉強だけじゃない！

多彩なサークル活動で学生生活を有意義に

2団体を学生部長表彰

学術文化会・公認サークルなどの中で顕著な活動を行っている団体に贈られる平成16年度の学生部長賞はフランススキー同好会(顧問・川上周三文学部教授)とサーフィン愛好会(顧問・池本正純経営学部教授)に決定し、1月28日、生田キャンパスで表彰式が行われた。両団体の主な成績は下記のとおり。

【フランススキー同好会＝全国学生岩岳スキー大会で男子総合優勝ほか】

【サーフィン愛好会＝春季全日本大学サーフィン選手権大会において団体の部4位入賞ほか】

サークル紹介

吹奏楽研究会

12月11日、八王子市民会館で、吹奏楽研究会の第41回定期演奏会が開かれた。「カルミナ・ブラーナ」「カルメン」のダイナミックな演奏に700人の聴衆からは熱い拍手が送られた。部員は約40人。「1年生はほとんどが初心者です。丁寧に指導しますからぜひ入部してください」と新代表の鹿毛優子さん(経済3)。

